

研究ノート

研究ノート

キャンパス空間に関する調査プロジェクト (No.1) 一橋大学生の学食利用に関する基礎的調査

Research Project related to Campus Space (No.1)

A Basic Survey of Hitotsubashi University Students' Use of Cafeterias

毛塚泰樹¹⁾・内野海平¹⁾・山崎隼¹⁾・島崎陸¹⁾・島袋秋人¹⁾・武貞充未¹⁾・
岡本純也^{2)・3)}

- 1) 一橋大学大学院社会学研究科
- 2) 一橋大学経営管理研究科
- 3) 一橋大学学生支援センター学生相談室

<キャンパス空間に関する調査プロジェクトについて>

コロナ禍の数年間には大学キャンパスにおいても人々が集まることが規制され、一橋大学学生相談室でも、それまで静かに過ごせる「居場所」として学生に開放していた待ち合いスペースを待ち合い時のみの利用に限定した。2023年にCovid-19が収束に向かい、「居場所」機能を復活させることを室内で検討した際に「キャンパス内には他に学生の『居場所』となる空間がどのように配置されているのか」という問いがスタッフから出された。それらをマッピングして来談者に共有できれば、限られた室内の空間を補完する、同様な機能をもったスペースが確保できるのではないかと発想からの発言であった。そこで本学社会学研究科の大学院生有志に協力を依頼し、キャンパス空間の使用に関する調査を実施してもらうこととした。リサーチ・クエスチョンの設定も含めて彼ら・彼女らに任せたが、今回は「学生食堂」の利用に焦点を当て、その実態に関する質的調査となった。その結果、今回はグループインタビューという方法を採用し、本学学生の学食利用に関して基礎的なデータを得ることができた。今後は量的な調査も加えながら、学食以外の教室や図書館、各所に配置されたベンチ等にも着目しながら、キャンパス空間がどのように利用されているのかについて継続的に調査を実施していきたいと考えている。

一橋大学学生相談室 室長 岡本純也

要約

大学生及び大学院生の学生生活において、キャンパス内にある学生食堂（以下、学食）は生活支援、学修支援のインフラとしての存在意義が大きい。一方で、学外にも複数の飲食店がある中で、学食を選択する理由に関するデータは非常に少ない。そのため、一橋大学生の生活実態を把握することを目的に、その一環として学食の利用状況に関する調査を実施した。学生同士のグループインタビューを行った結果、学食は、利便性等のメリットだけでなく、明確な理由がない時にも気軽に利用できる選択肢として機能しており、学生の食生活における選択の負荷を軽減していることが特徴として示唆された。一方、一人で学食を利用する際には、混雑時間帯を避ける傾向にあることも確認された。利用時の人数による利用時間帯の違いに関する背景や要因等、今後、サンプル数を増やしながら検討していくことが望まれる。

キーワード：学生食堂、キャンパス空間、居場所

1. はじめに

大学生や大学院生等の「学生生活」は、多くの者にとって、親元で暮らす高校までの生活から社会人として自立・自律していくまでの「橋渡し」となる時期に位置し、一人前の大人となるための準備期間ともいえる。学業面の変化はもちろんのこと、生活面においても、一人暮らしを始める者も多く、それまでとは違う新しいタイムスケジュールや人間関係の中で時間を過ごすこととなる。その期間の食生活や食行動は、その後の人生においても影響を与えると考えられる。

そして、学生食堂（以下、学食）は、大学構内に位置する食堂として、大学生・大学院生の食生活を栄養面で支えるだけでなく、学習や課外活動を共にする仲間、指導教員等と気軽に交流する場となっており、その生活支援・学修支援のインフラとしての存在意義は大きい。

学食に関する先行研究については、いく

つか挙げることができるが、食事内容・価格や栄養管理面（江田, 2009 ; 小池, 2009 ; 村田, 2019）、食堂の運営状況（村田・山部, 2017 ; 高畑他, 2021）に関する議論が多く、大学という場における学生の「食事という行為」に付随する様々な要素を包括的に議論する視点が十分ではない。また、調査方法についても、上記の先行研究をはじめ、質問紙による量的調査を採用するものが多く、学生へのインタビュー調査を通して得られた語りから実態にアプローチするものは、管見の限り確認できていない。

そこで、本調査は、2023年度に一橋大学に在籍している学生（大学生・大学院生）に対して行なったグループインタビューをもとに、現在の大学生の学食の利用実態に迫り、学生の「食」に関わる生活の在り方について検討を行った。本調査で得られた知見は、あくまで一橋大学の学生の食生活の実態に関する事例の報告となろうが、日本のどの大学においても学生はキャンパスにおいて学習、課外活動を展開してお

り、それに関わる食生活のベースとしての「学食」の位置づけは共通するものであると考える。そのような点で、本報告は学食の存在意義の再確認や日本の学食の「学生生活インフラ」としての質の向上にも資するものとなる。

一方、一橋大学のキャンパス外（国立駅周辺）にはさまざまな飲食店がある。しかし、少なくない一橋大学の学生が外の飲食店ではなく学食を利用している。そのため、本調査は、リサーチクエスト（以下、RQ）を「一橋大学の外にも飲食店があるにもかかわらず、なぜ一橋大学生は学食を利用するのか？」と設定した。そして、調査の結果、「利用目的・利用場面に即した学食の積極的利用」、「消極的理由による学食選択」、「混雑時間帯を意識した利用」の3項目に関する知見を得られた。

以下、調査対象者の語りをもとに、上記の問いについて紐解いていく。

2. 調査方法

概要

本研究においては、調査方法としてフォーカス・グループ・インタビュー（以下、FGI）を採用した。インタビューは、(a) 調査者のみ6名での相互グループインタビューを1回実施し、(b) 調査者3名、調査対象者4名のグループを2つ作成し、1回ずつグループインタビューを実施した。(a) のインタビューは、2023年10月30日に、(b) のインタビューは2023年11月9日と同年11月15日に実施した。各インタビュー時間は1時間程度であり、全てのインタビューを遠隔会議システムのZoom上で行った。

FGIを採用することの妥当性については、以下の通りに検討した。まず、学生による図書館の利用に関する調査でFGIを

採用した谷他（2016）は、対象者に直接話を聞くことができない質問紙調査や観察法のみによる調査では、調査者側が認識した利用方法のみに注目しがちとなり、調査対象者の認識を正確に把握することは難しいと指摘する。一方で、インタビュー調査では、調査対象者の実際の行動や持っている考えも分析できるため、より実態に即した分析が可能となると述べている（谷他、2016）。また、FGIを行った理由は、調査者同士、調査者と調査対象者、調査対象者同士の相互交流から新たな知見が得られると考えたためである。Vaughn et al.（1996 井下他訳 1999）によると、FGIは、探索的な研究をする場合に最も適しており、調査研究の最初の段階においてしばしば用いられる。前述の通り、学食に関する先行研究については、大学という場における「食事という行為」に付随する様々な要素を包括的に議論する視点が十分ではなく、また質的調査も少ない。したがって、「仮説生成型」の研究として位置づけられる本研究においては、FGIが適した調査方法であると考えられる。

また本研究では、調査対象者も含めたインタビュー調査の前に、調査者のみ6名でのインタビュー調査も実施した。調査者はこのインタビュー調査をオートエスノグラフィー（以下、AE）と位置づけた。AEは、調査者自身を研究対象とし、自身の主観的な経験について、「私」がどのように、なぜ、何を感じたかという自己再帰的に考察することを通して、文化的・社会的文脈の理解を深める質的研究方法論である（井本、2013）。濱名（2018）は、AEを採用する保育研究の可能性の1つとして、当事者の視点から保育研究を行うために、研究者自身の保育経験を、理論的な意義があるデータとして扱える可能性があることを指摘する。本研究においても、調査者6名

は本学の社会学研究科に在籍する大学院生であり、学食利用の当事者でもある。したがって、調査者自身の経験や認識も、学食利用に関する仮説生成には有効だと考え、AEを採用することとした。

調査者

調査者6名は、前述の通り本学の社会学研究科に在籍する大学院生である。調査者の基本情報は以下のTable 1の通りである。なお個人情報保護の観点から、調査者自身も匿名化した。また、学年を明記することから、調査者についてはそれらを記載しないこととした。

調査対象者

調査対象者8名は、一橋大学に在籍する大学生または大学院生である。調査対象者の募集には機縁法を用いた。また、各回に参加する調査対象者の振り分けは、事前に確認可能であった学年をもとに、可能な限り各回に偏りが出ないように調整した。調査対象者のうち、G、H、I、Jは2023年11月

9日の回に参加し、K、L、M、Nは同年11月16日の回に参加した。また調査者のうち、B、C、Eが11月9日の回に、A、D、Fが11月16日の回に参加した。調査対象者の基本情報は以下のTable 2の通りである。なお調査対象者も同様に、個人情報保護の観点から匿名化した。

主な質問事項

主な質問項目は、学生の基本情報(所属、部活・サークル等の加入状況、居住形態)及び学食について(利用頻度、利用理由、利用しない理由、利用する場面、学食への要望、学食の喧騒を気にするか)等である。

倫理的な配慮

本調査の実施に際して、調査協力者には事前に調査同意書を配布し、全員から調査参加に同意を得た。また調査実施の際には、調査者から改めて調査に関する説明を実施し、再度全員から同意を得た。

Table 1 調査者の基本情報

	所属	部活・サークル	居住状況	利用頻度(現在)
A	社会学研究科	なし	一人暮らし	週 1~3 (夜利用あり)
B	社会学研究科	なし	実家	月 1, 2
C	社会学研究科	なし	実家	月 1
D	社会学研究科	なし	シェアハウス	月 1
E	社会学研究科	なし	学生寮	週 4
F	社会学研究科	運動系サークル	一人暮らし	利用なし

Table 2 調査対象者の基本情報

	所属	学年	部活・サークル	居住状況	利用頻度(現在)
G	社会学部	B4	文化系サークル	実家	週 0, 1
H	社会学部	B1	体育会系部活	学生寮	週 4
I	社会学研究科	M2	文化系サークル	一人暮らし、 実家	利用なし
J	社会学部	B4	体育会系部活	実家	週 0, 1
K	社会学研究科	M2	文化系サークル	実家	週 1, 2
L	商学部	B4	運動系サークル	一人暮らし	利用なし
M	社会学部	B4	文化系サークル	実家	週 2
N	社会学部	B1	文化系サークル	一人暮らし	週 1

3. インタビュー結果・考察

本調査の目的 (RQ) である「一橋大学の外にも飲食店があるにもかかわらず、なぜ一橋大学生は学食を利用するのか？」について、今回の語りから、まず、学生は学食の持つ特徴を積極的な理由と消極的な理由から総合的に判断し、学食利用に至っていることが示唆された。また、状況によっては混雑時間帯を避けて利用する選択をしている学生も少なくないようである。これらについてインタビュー時の具体的な語りを抜粋しながら考察していく。

なお以下の語りは、各回のインタビューでの発言を時系列に並べたものではなく、分析内容に合わせて抜粋して記載している。また、「あの」や「えー」といった発声については、語りの内容に影響が出ないと考えられる範囲で削除している。

学食のメリット（積極的な学食選択）に関する語り

まずは学食を積極的に選択する理由として語られた内容を、利用目的と利用場面の視点から整理する。

利用目的

1. 価格

A: 自分がそもそも 9 割くらい外食の人なんですけど、一橋の学食で食べるのは、前後に授業があるときなので、あと、比較的安いし、野菜も取れるしってなので自分は学食で食べることが多いですね。

C: 安く済ませるとなると、やっぱ学食が一番楽かなって思ってた。

G: あとは単純に安いっていうのが大きくて。

H：普通の定食屋とかに比べるとすごい安いので、生協はそこがありがたいと思って利用してるっていうのもありますね。

I：生協の単価の方が安いかな。

J：後輩からやっぱりなんかご飯誘われたりすると、奢るのがちょっと大変なんで、ちょっと安めのところに行こうかなみたいな時に学食行ったりみたいな感じで使っていた。

J は後輩に奢る文化がある部活動に所属しており、後輩に奢る際は値段を気にかけてお店を選んでいることが分かる。上記6名の発言から、学食の一つの魅力として、価格の安さが挙げられると捉えることができる。

2. 栄養バランス

A：昔から結構健康オタクみたいなのところがあるので、野菜と魚と肉とバランスよく食べる。

C：魚はあんま考えてないんですけど、野菜はとりあえずとつかなきゃみたいな主義で。

D：(よく選ぶメニューとして) 冷蔵庫みたいなところに入ってる野菜1つ。

G：生協が自分で取ったりできるので、すごいバランス良く安く食べられるっていうのが、楽しいなと思って、使っていました。

H：たまには、栄養的に偏ったラーメン屋に行ったりしてて。その分があるので、生協行くときは、きちんと野菜も取ろうと思ってて。生協は結構、栄養をきちんと取る場として利用してますね。

A、C、D、G、H は共通して、学食メニューの栄養について述べている。学食では、栄養素に関して詳細に揭示されており、栄養を考慮して食事を選んでいることがわかる。また、飲食店ではなかなかみられない小鉢や魚類単品のメニューも豊富である点も、学食を選ぶ重要な要素といえる。

3. 立地・移動

B：そうですね。大体、それこそ大学の、ゼミの前に寄るから、何かその時間、他の飲食店だとなかなか。なんか微妙なところだと思うんですよね、国立の飲食店って。

E：学食は図書館だったりに近いっていうのと、研究室も近い。

J：東の生協が、部の活動場所からすごい近くて、目と鼻の先にあるんで。

H：今は特に、西講義棟が本当に生協の目の前にある場所で、2限とかに授業をとることが結構多いので、まず、場所の近さとかもある。

G：私が授業が2、3限で入る事がすごく多かったんで、他の飲食店まで行くとちょっと時間がないのかなっていうことがあったり。

I: 授業の合間に食べるのにちょうどいい。

N: わざわざ大学の人が外まで出て、また歩いて戻ってくるのが手間だなんて思ってしまうので。

B、E、J、Hの発言から、学外の飲食店と比較した学食の魅力の一つは、移動距離の短さであるといえる。また、G、I、Nの発言から、45分の昼休み（一橋大学の2限と3限の間の昼休みは45分である）の間に学外の飲食店に行くことは難しく、学食を選ばざるを得ないともいえる。

4. その他

H: 僕は基本的に、自転車とかを使いたいんですけど、国立の飲食店は、あんまり、駐輪場とかがあるところが少ないと思ってるので、まあ、手短に済ませるなら生協がいいかなって。

Hは、自転車で通学している。そのため、駐輪スペースの有無が飲食店を決める一つの要因となる。学内に駐輪スペースが設けられており、駐輪スペースについて考える必要がない点も学食を選ぶ理由といえる。

N: 提供も早いです。並びたくないというのもあります。

Nは、学食の提供の速さについて挙げています。飲食店では、席についてから注文をし、提供まで時間がかかるが、学食では注文するとすぐに提供される。この点が他の飲食店との大きな違いであるといえる。

利用場面

1. 講義・ゼミ前後

A: 週2回くらいは昼前後にゼミとかがあるので、その日はとりあえず学食行くって感じです。

B: ゼミ終わりとかですかね、3限に〇〇ゼミ(Bが所属するゼミ)とかあるので。

C: ゼミが終わった後行く。

G: 授業があるときは大体毎回使ってたなっていう感じです。

H: 4限とかで(授業が)入ってる時も、ちょっと早めに大学来て、生協の空いてる時間帯に食べるっていうことはよくします。

L: 授業前とか授業後とか、3限とかがあるときに使っていた。

講義・ゼミの前後に利用する場面が多いといえる。これは、利用目的の「立地・移動」で明らかになった通り、教室との距離の近さが大きな理由であるといえる。

2. 学内施設利用前後

E: 学食は、図書館だったりに近いっていうのと、研究室も近い。

I: 図書館で、資料集めるのに通ってて(…)、作り置きを作っていない、夕飯ないなっていう日は、生協の500円のやつ使って食べて帰るみたいな。

E、I は、図書館を利用する際に学食を利用すると述べている。これも講義・ゼミ前後の利用と同じく、「立地・移動」で明らかになった通り、教室との距離の近さが大きな理由であるといえる。

3. 友人との交流

I：久しぶりに会う友達と待ち合わせする場所が生協みたいな感じになってて。

K：週に1回のお昼は、毎回、その、友達と決まってこの時間に、この日のこの時間に集合みたいな感じで決めて、そこで一緒に食べる。

M：外で食べるってなると結構ちゃんと約束して、あのお店決めてこれ行こうっていうイメージなんですけど、なんか学食とかだと、そのままあの2限が終わって、ちょっともうちょっと話したいよねってときに学食行くみたいなノリで行ける。

学食は、メニューが麺類や丼もの、魚類等多様であるため、複数名で利用する際にジャンルについて合意を取る必要性がない。また、パンショップやコンビニエンスストアで購入したものを持ち込むこともできるという点で、友人と利用しやすいのではないかと推察できる。

「理由を必要としない場」としての学食（消極的な学食選択）に関する語り

次に、調査協力者に、学外の飲食店と学食の利用について比較しながら語ってもらなかで明らかになったのは、学外の飲食店を利用するには何らかの「比較的積極的な理由が必要である」のに対して、学食

を利用するには「明確な理由が必要ない」ということであった。

学外の飲食店を利用するにあたって、比較的積極的な理由を必要とすること、学食利用には明確な理由が必要ないということは具体的にどういうことか。たとえば以下のような調査協力者の語りがある。

N：私、A店（学生に人気のお店）もまだ行ったことなくて、行ってないんです。なんか、やっぱりオーダーしてから時間がかかりそうだというのと。なんかわざわざ大学の外まで出て、また歩いて戻ってくるのが手間だなんて思ってしまうので。行くとしたら、東側の一番近いファミリーマートに行くかもしれません。

M：時と場合によるんですけども何か学食が結構ちょうどいいというか。外で食べるってなると結構ちゃんと（友達と）約束して、あのお店決めてこれ行こうっていうイメージなんですけど。なんか学食とかだと、そのままあの2限が終わって、ちょっともうちょっと話したいよねってときに学食行くみたいな、ノリで行けるので。

大学の外に出て飲食店に赴くという行為は、「わざわざ（…）外まで出て」「ちゃんと（友達と）約束して、あのお店決めてこれ行こう」という語りからも読み取れるように、(a) 大学の外に出るという選択、(b) 数あるお店の中から一つ選ぶという選択を学生に強いる。(a) の場合、大学の中から外に出るという移動の手間・時間を掛けることを正当化する積極的な理由を必要とする。後述するが、学食の利用は移動の手間や時間の費用を伴わないためそ

のような正当化の必要性がなく、「正当化を必要としない」ことが「学食を利用する消極的な選択を正当化する語り」として現れるようになる。(b)においてはMの場合、「友達との約束」として前景化する。数ある飲食店のなかから一つを選ぶ、つまり「お互いに食べたいものを合わせる」という合意を取る必要が生じる。それと比較して、学食を利用する際には「そのまま2限が終わって(…)ノリでいける」といったように、他者との合意形成を必要としない(ハードルが低い)ことが読み取れる。それは学食が、誰もが何かしら食べたいと思えるような幅広いメニューを取り揃えていると、学生に認識されていることが可能にしていることかもしれない。少なくとも、学食が気軽に選択できる選択肢として学生に認識されていると述べられるだろう。学外の飲食店を利用する際には、以上のような複数の「選択」が要請され、その選択を正当化する「理由」が必要であると考えられるのに対し、学食の利用は明確な理由を必要としないと考えられる。

前節で記したように、学食を利用する積極的な理由づけの語りが無いわけではない。しかし、そのような語りが「学食を選択する消極的な語り」とセットであることは見落としてはいけないだろう。

C: 火曜に2限と4限で授業入ってたんですよ。ってことは、3限が暇になってしまう。どうしても大学付近にいて、あ、家からちょっと帰ると渋い距離なんで、どうしても大学付近にいなきゃいけない。で、そしたら、お昼をどこかで食べよう。じゃ、安くなるのどこかな、学食かな、みたいな感じで。(…)今学期、秋、冬になってか

らは、その3限の間、暇だなみたいなのが、なくなってしまったので(学食を利用しなくなった)。

J: そうですね、部活ある時、あった時だと、週1、2ぐらいは多分行ってたかなって感じですかね。やっぱり、東の、東の生協がすごい、部の活動場所からすごい近くて、目と鼻の先にあるんで、やっぱり時間ない時とか(…)でも僕、昼ご飯結構ゆっくり食べたい人だったんで、あんまり2、3限に両方入れるってことはあんまりしてなくて、どっちかだけにしてゆっくりご飯食べたかったんで(…)わざわざ学食行かないで、ちょっと外出て、みたいな。

(…)ま、でも(学食は)安いし、近いし、まあ、うん、しょうがないかみたいな、やっぱり感じで。そうですね。ま、大体もう、ま、量あればいっかみたいな、量食べればいっかみたいな感じになってっていう感じだったんで、まあまあ、妥協みたいな感じでっていうところはちょっとあったかな。

A: 自分がそもそも9割くらい外食の人なんですけど、一橋で学食を食べるのは、前後に授業があるときなので、あと、比較的安いし、野菜も取れるしってんで自分は学食で食べることが多いですね。昼は特に。週2回ぐらいは昼前後にゼミとかがあるので、その日はとりあえず学食行くって感じです。

以上の語りの中だけでも学食を利用する積極的な理由として安い、早い、近い、野菜を取れる等の要素があげられているが、同時に「3限が暇で(…)大学付近に

いなきゃいけない」、「しょうがないか(…)妥協みたいな感じで」、「とりあえず学食いくって感じ」といった形の消極的な語りとセットであることもわかる。それは一面では、学食を利用するという消極的な選択を正当化するものとして値段の安さや栄養バランス等が紐づけられていると考えることも難しくはない。学食が近くて、時間がかからないということに関しては、「わざわざ大学の外に出る理由がないために学食を利用する」ということが、「近いので学食を利用する」という形に変換され、学食を選択する積極的な理由づけとして語られているということも大いに考えられる。

以上のことから、今回の調査から述べられることは、学食が、学外の飲食店と比較されるなかで、「積極的な理由を必要としない場」、気軽に選択できる選択肢として機能しているということであり、学生の食生活における選択の負荷を軽減しているということである。

混雑時間帯回避に関する語り

最後に混雑時間帯を意識した選択に関する語りを考察する。

一橋大学の学食も、学食である以上混雑してしまう時間帯が生じてしまうことは避けられない。特にお昼休みの時間帯である 12 時 30 分から 13 時 15 分までの間、一橋大学の学食は多くの学生で賑わう。しかし、今回行ったインタビュー調査では、そういった混雑する時間帯を避けて学食を利用する語りをいくつか確認することができた。

A：基本近くに人がいない席を取るんですけど、2 限とか無い時は早めに行って空いているところを取るんですけど、昼休みの時間は結構混んでるので、それこそさっき言ってた壁際の席とかで食べることが多い気はしてますね。

H：僕は極力、人は少ない時間帯とか、西食堂、確か 11 時から空いてると思うんですけど、11 時ちょうどに着くように、大学行って、ほぼ誰もいない状態で、一人で食べる時は食べたりしてるので、そうですね。誰かと食べるときは、騒がしいところでもいいんですけど、一人で食べるってなると、混雑する時間帯は避けるようにはしてます。

A と H に共通しているのは、学食が混む前に利用している点である。一橋大学では 2 限が 12 時 30 分に終わりお昼休みになるため、学食が混雑する目安の時間はやはり 12 時 30 分以降である。A が「2 限とか無い時」と語るように、自らの時間割に合わせ、混雑する前に学食を利用しているのである。

では、なぜ混雑する時間帯を避けて学食を利用するのだろうか。その理由として混雑時間帯特有の賑やかさが語りの中で確認された。学食が多くの人で賑わうお昼休みは、利用客の多さから活気のある雰囲気になる。しかし、そういった活気のある空間を避け、静かな落ち着いた空間で昼食をとりたいと考える人もいるのである。

G：私もあまりあの騒々しいのが得意な方ではないので、一人になりたいってときは、大体あの大学の、いいのかわから

ないんですけど、空き教室に行って一人で食べるってことをしてます。そのままそこで自習もできるしっていうので、空き教室を使うことが多いです。

M: うるさいとまでは感じなくても、結構その賑やかかっていうか、活気を感じるみたいなとき、なんか、私的に静かなところで食べたいときって結構時間がなくて、本当にすぐ食べたいみたいな、学食行くと友達と約束してなかったとしても、知り合いに会う可能性があるので、そういうの避けたいなって思うときは、それこそ生協でパンだけ買って、何だろう、空き教室行って、自分一人の場所見つけて、食べながら作業したり、っていうのは割としてますね。

G と M の語りで特徴的なのは、混雑時間帯の学食の騒々しさから逃れるために、学食を利用するのではなく、空き教室を利用する点である。G は他の語りで「パンショップで買ったりだとか、あとは普通にコンビニで買ったりっていうことが多いです」と話している。M も語りの中で生協でパンを購入しており、二人とも学内外で購入したものを空き教室で食べているのである。一方で、同じ学食の喧騒についても、次のような語りもみられた。

L: そんなうるさいと思ったことなく、元々学食でそういうもんだってという思いがあるので。そんなにうるさいなと思ったことがなくて、でもなんで自分が避けるかっていうと普通に混むから、混むのが嫌だっていう話なので、なので何か学食がうるさいなっていう思いはあんまり思ったことなく、一人で食べる時に時間を外すの

は空いてるからっていうぐらいの理由かなと思います。

K: うるさくて居心地が悪いみたいなことは思ったことないです。

G や M が学食の喧騒から逃れていた一方で、L や K は学食のそういった面については否定的に考えることはなく、「元々学食でそういうもんだってという思い」がある。つまり、学食の利用者は自分のもつ感覚に合わせて学食や空き教室等、学内施設を利用しているのである。自分なりに心地よく過ごすことのできる場を見つけ、学生生活を送っているのである。

また、G や H、M の語りからは一人のときに混雑を避けていることがわかる。学食を利用する時間帯には一人で利用するのか、もしくは複数人で利用するのかといった点に関係している可能性がある。こういった混雑の回避と利用人数に関する語りは以下からも確認することができる。

L: 一人で食べるときって基本的に時間を外して行って、結構混雑しない時間とか見つけていったので、時間を狙って行って、逆に友達と行く時とかは結構ざわざわしてる時間帯とかでも全然構わず食べてたっていう感じです。

N: 私は割と個人、うん、一人で何か、その授業の合間に何かあんまり時間かけたくないときに一人でさっさと行って、割と早いので、店だとオーダーしてから作ってもらう時間が結構かかると思うんですけど生協は、学食は混んでる時間を避ければ、

結構早いイメージがあるのでそちらを使わしてもらってますね。

以上より、調査協力者の中には一人のときは「混雑しない時間とか見つけ」たり、「学食は混んでる時間を避け」たりしている様子うかがえる。ただし、今回の調査では一人で学食を利用するときは混雑時間帯を避ける理由についての語りを確認することができなかった。混雑の回避と利用人数の関係については多くの調査協力者 (G、H、L、M、N) が語っており、その詳細を今後明らかにしていく必要がある。

一方で、上記の語りから、少なくとも一人である際に、学食の混雑や騒々しさが、学生にとって居心地の良さにつながるものとして認識されているとは言い難い。池上・中嶋 (2013) は、学生が一人で学食で食事をする様子を他者から見られることに対する羞恥心について、心理学的な実験から、他者との心理的距離が中程度 (顔見知り程度) だけでなく、心理的距離が近い場合も、心理的距離が遠い人と比べると強い羞恥心を生じさせ、対人不安傾向とも関連が高いことを示している。したがって、本調査においては語りが確認できていないものの、混雑の回避と利用人数の関係を分析するにあたって、「孤食」や「他者からの視線」といった側面も分析に有用である可能性が示唆される。また、田川 (2011) の調査では、大学内の様々な施設の中で、「学食・学生ホール」を「くつろげる場所」とであると回答した学生の割合が最も高くなった。本学においても、学食が、学生がくつろぐことができる場所として機能していることも想定される中、上記の議論を

踏まえると、学食が誰にとってどのような場面においてくつろぐことができる場所なのか、といった視点も重要だと考えられる。

4. 本研究のまとめ

本研究の結論

本研究では、「一橋大学の外にも飲食店があるにもかかわらず、なぜ一橋大学生は学食を利用するのか？」という RQ を設定し、その要因や背景を明らかにすることを試みた。上記の RQ に対して本研究ではグループインタビューを用いたが、調査対象者の語りから、以下の仮説が示唆される。

まず、学食の利用目的は、価格が安いため、栄養バランスの良い食事をとるため、学内に立地されており移動が楽なため、その他、の大きく 4 つに分類できる。また、学食の利用場面は、講義やゼミの前後、図書館に用事がある際、学内の友人と食事をする際、の 3 つに分類できる。

次に、学食の利用に際して、学生は必ずしも「積極的」に学食を利用しているわけではなく、学外の飲食店と比較したうえで「消極的」に学食の利用を選択している可能性が示唆される。学外の飲食店を利用する場合、大学の外に出るという選択、数あるお店の中から一つ選ぶ、という選択を伴う。そのため、その選択を正当化するために、「比較的積極的な理由」を必要とする。一方、学食を利用するにあたり、積極的な理由づけの語りも確認できるものの、そこには同時に、自身が置かれている状況から消極的に学食を利用する語りもみられる。つまり、学食を利用するという消極的な選択を正当化するために、消極的な選択と学

食の利点が紐づけられ、結果的にそれが、学食を利用する積極的な理由として語られているとも考えられる。以上から、学食は、学外の飲食店と比較されるなかで、「積極的な理由を必要としない場」、気軽に選択できる選択肢として機能しており、学生の食生活における選択の負荷を軽減していることが示唆される。

また、学食は昼休みの時間である12時30分から13時15分を中心に混雑するが、調査対象者の中には、あらかじめ学食の混雑時間帯を避けて利用する者もいることが確認できた。混雑時間帯に発生する学食特有の賑やかさについては、その喧騒を避けているために、空き教室を利用して昼食を静かな落ち着いた空間でとる行為が確認できる。一方、学食における喧騒を否定的に考えることなく、それを当然起こりうるものと認識していることがわかる語りも確認できる。また、学食を利用する際、一人で利用する場合では混雑時間帯を避けるものの、複数人で利用する際には混雑時も利用する、といった行為も確認できる。ただし、人数による利用時間帯の違いについては、その背景や要因を明らかにできていない。しかし少なくとも、混雑時間帯を回避するという行為が、必ずしも喧騒から逃れることだけを目的としているとはいえないことが示唆される。

本研究の意義

本研究では、一橋大学生の生活実態を把握することを目的に、その一環として学食の利用状況に関する調査を実施した。調査の結果、学食での食事を通して、学生は単に栄養を摂取するだけでなく、一緒に食事をとる友人と交流をしていることが明ら

かになった。置かれている生活状況が学生ごとに異なる中で、学食は、比較的安価に食事を提供することで幅広い学生が利用することを可能にしており、その果たす役割は多くの学生にとって重要だといえよう。本研究は、学生生活においてある種「当たり前」に存在している学食を対象に研究をすることで、その存在意義や重要性を上記のように言語化することができた点において、意義があるものだといえよう。

今後の課題

本研究では、調査対象者のサンプル数が少なく、その大半が社会学部および社会学研究科の学生であることから、サンプルに偏りがあるといえる。このような偏りが調査結果に反映されている可能性は否定できない。またグループインタビューという手法を用いていることから、得られた知見が仮説の域を出ないことも課題として挙げられる。

また、今回の調査では一人で学食を利用する際、混雑時間帯を避ける傾向にあることが確認できたが、その理由は確認できなかった。混雑の回避と利用人数の関係については、その詳細を今後明らかにしていく必要があるだろう。

以上の課題を踏まえて、学食をはじめとしたキャンパス空間の機能を整理するために、今後は、より大規模なインタビュー調査、また学生全体を対象としたアンケート調査を実施する等して、より妥当性の高い仮説の生成、また仮説の検証を目指す。

そのうえで、一橋大学生の学生生活をより充実させる一助として、学生がその時々ニーズにあった居場所を選択しやすくなるような知見を生み出すことを目指す。

引用文献

- 江田 節子 (2009). 学生食堂の利用状況 (現状)と課題 関東学院大学人間環境学紀要, 12, 43-51.
- 濱名 潔 (2018). 保育研究における自己エスノグラフィーの可能性と課題—課題を解決する工夫としての日記とTEM の活用— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 67, 99-108.
- 池上 貴美子・中嶋 美希 (2013). 学生食堂での個食における羞恥心に心理的距離が及ぼす影響 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 5, 9-17.
- 井本 由紀 (2013). オートエスノグラフィー 藤田結子・北村文 (編) ワードマップ 現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践— (pp.104-111) 新曜社
- 小池 鉄夫 (2009). 大学生の食生活調査から見る学生食堂の在り方 観光学研究, 8, 39-47.
- 田川 隆博 (2011). 学生満足度の分析—名古屋文理大学満足度調査より— 名古屋文理大学紀要, 11, 81-86.
- 高畑 彩友美・小谷 清子・吉本 優子・福田 小百合・尾崎 悦子・東 あかね (2021). 京都府内の大学の学生食堂における食事と食情報の提供実態 栄養学雑誌, 79(5), 293-301.
- 谷 奈穂・竹内 茉莉子・池尻 亮子・丸茂里江・庄司 三千子・國本 千裕・白川優治 (2016). 図書館における学生の行動とその行動に係る環境の要素—フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査— 大学図書館研究, 104, 55-66.

村田 まり子・山部 秀子 (2017). 北海道の大学における『学生食堂』の現状と課題 藤女子大学人間生活学部紀要, 54, 57-68.

村田 美穂子 (2019). 『学生食堂に対する意識調査』から見た大学における昼食の実態と課題 広島文化学園短期大学紀要, 52, 15-24.

Vaughn, S., Shay, J. S., & Sinaguh, J. M.(1996). *Focus Group Interviews*. Sage. (ヴォーン, S., シューム, J.S., シナグブ, J.M., 井下 理 (監訳) 田部 井 潤・柴原 宣幸 (訳) (1999). グループ・インタビューの技法 慶應義塾大学出版会)

付記

謝辞

本調査にご協力いただいた皆様には感謝の意を表します。